ボランティアで貢献されているのは

今年度の初めての地域ボランティアがありました。この土日に行われた釜戸町の文化展です。二日間で延べ十八名の生徒が参加しました。大湫町や土岐町に住む生徒の参加もあり、今年度も出身地区を越えたボランティアへの参加が続いていたことはとてもうれしい事実でした。

釜戸公民館の関係者の方々は、この状況の中、多くの中学生が参加してくれたことや、予定以上の動きや働きをしてくれたことに感謝してみえました。私の顔を見ると、「生徒さんが本当によくやってくれています。文化展だけでもできて、本当にうれしく思います」と声をかけてくださいました。参加者にはスタッフTシャツが配られ、それを身に付けた北中生は生き生きと取り組んでいました。

そんななか、思ったことがありました。「ボランティア」という言葉はよく使いますが、ボランティアはお手伝いではないということです。お手伝いだけだったら、ボランティアのベクトル（ちょっと難しい言葉でしたね。「矢印」ぐらいに考えておいてください。）は公民館だけに向くはずです。

参加した生徒たちのボランティアのベクトルはだれに向いているのか……それは文化展に来られた地域の方に向いているのです。準備や片付けもボランティアですが、いちばんのボランティアは、来場者との会話だと私は考えています。つまり、「ボランティア＝コミュニケーション」なのです。

参加した生徒の様子を見せてもらいました。初対面であっても、来場者と言葉を交わしていた北中生の姿が印象深く残っています。作品を見ようと近所からやってきたお年寄りと言葉を交わす姿、小さな子ども連れの親子に声をかける姿、福引を盛り上げようとはつらつと接する姿……これがボランティアの醍醐味（だいごみ）だと私は思いました。

この地域の方とのコミュニケーション、実は北中生にとって貴重な社会勉強だと私は考えています。中学生が日々接する人物は限られています。そんな中で、初めての方との出会い、年齢が違う人との出会い、立場の違う人との出会いが経験できるのは、こういうボランティアに参加した時なのです。

「人あたり」というのも、社会で生きる上での大切な力です。ボランティアに取り組むとき、貢献されているのは本当は北中生の方かもしれませんね。

（十月二十六日　記）